



発行所
社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

物作りの現場から思ふこと

天本和馬

いはゆるバブル経済の崩壊以降の、わが国の経済的現象をもって、「失われた十年」或は「第二の敗戦」と称して反省的に、やや自嘲的に捉へる見方がある。巨額の財政的金融措置を講じてもなかなか効果が出ないのだから無理もない。

しかし一方では、私の所属するメーカーのやうにバブル以前と変らぬ日々が続いてあるところもある。中小企業を含めて今日、愚直に物作りに進化するメーカーの姿を知つてもらひたいと思ふ。さうした企業の内情はおそらくこの十年で一変してゐるのではなからうか。十年前と同じ生産品はほとんどないのが実情であらう。たとへ十年来同じ物を製造してゐたとしても、その生産方法、或は設備の運転方法は様変わりしてゐる。

新しい技術と情報、国境を越えた競争等によつて、「コストの低減と品質の向上」を並行的に実現しなければならぬからである。日本のメーカーはこの難題に正面から立ち向ひ生き残りを賭けてきた。かつてはアジア諸国の追ひ上げにより自信を失ひかけた時期もなくなつたが、これまでの蓄積に裏づけられた自信めいたものが生産現場には甦つてゐる。

生産力の源泉は設備と人である。この両者は一体不可分である。世界中のどの国でもほぼ同じ仕様の設備が似た価格で購入可能であるが、設備の能力を100%発揮させることは容易ではない。設備といへども病氣もすればケガもする。いはゆる故障である。生産設備には通常設備価値に対するある比率で予め修理費

用が見込んである。設備も人の健康と同じで、不摂生により病氣をしてから医者にかかる場合と、健康管理に気をつけながら毎日を送つてゐる場合とでは設備の治療費つまり修理費用が格段に異つてくる。設備の善し悪しは人によつて大きく左右されるのだ。

日本の製造現場では多くの場合、製造の担当者は同時に設備を診断し簡単な故障であれば自ら修理することもある。私の所属する現場では夜間・休日でも設備が稼動する体制となつてゐる。このため夜間・休日に設備の大きな故障が起つた場合には、設備の修理部門が駆けつけるとともに製造部門の担当時間以外の者も出勤して生産の調整を実施しなければならぬ。これは人間の患者であれば自ら病院に行くことができるが設備の故障は設備の場所に人が行かなければならないからである。それで

も手に負へない場合には設備機器を製造したメーカーに連絡・相談するがほとんど即日にサービスマンが駆けつけるのが普通である。

このやうな地道な働きが日本全国いたるところで展開され、日本の物作りの現場を支へてゐる。例へば例年、四月末からの連休中、各行楽地の賑ひぶりが新聞やテレビで報道さ

れるが、さうした中でも各種のサービスは平常通りに提供され、交通機関も当然のやうに正常に運行されてゐる。多くの工場も稼動してゐたはずである。その生産現場では前述したやうな変らぬ努力が続けられてゐる。発注者(相手)の利便を第一に考へる伝統的な勤労観が今日の生産現場を支へてゐるのだ。もしわが国が物作りの努力を忘れ、いたづらに実態のない目先の利益のみを追求するやうになれば子孫に残すべき最もかけがへのない宝を失ふことになる。

この四月新入社員が入社してきたが、入社前、ある製造現場の管理者が次のやうに語つてゐた。「自分の部署に新入社員が配属されれば数年で一人前にしてみせる自信がある」「過保護に育てられた人間であつても製造現場で鍛へれば大丈夫だ」「たとへ親が出てきてもお任せくださいと自信を持って言へる」と。私もまったくさう思ふ。

話は跳ぶがイラクに派遣された自衛隊の復興への取り組みに対するかの国の期待、眼差しには熱いものがあるやうである。長年にわたつて育んできたわが国の物作りの実力が世界から期待されてゐるのを強く感じる。

(関西熱化学株勤務 数へ五十三歳)